

ドイツからの近況便り

有坂 陽子 (ありさか ようこ/ドイツ ハノーファー在住)

去年秋から冬にかけて、毎週金曜日はグレタさんの活動「フライデー・フォー・フューチャー(FFF)」のデモがあり、その参加なら授業を休むことを許可する先生や、先生も含めクラス全員で参加する学校もでるなど定着されつつあった。しかし今年1月中旬からコロナ感染ニュースが広まり、初めは、中国での病気、と他人事だった。その頃日本は中国に次ぎ感染者数世界第二位で、私は3月24日に帰国予定だったが、ちょっと気を付ければ大丈夫だろうと思う程度だった。3月下旬に帰国予定の友人も数人いたが、皆まったく心配していなかった。

しかし、1月下旬には、ヨーロッパ圏にも広がり、1月28日には「ドイツでも初感染」が新聞のトップニュースとなった。3月9日にはドイツ西部の州で2名の死者が出た。その時点ではドイツでの感染者数は1100人を超えていた。

それ以後あつという間に事情は悪化し、ドイツでは主に南部と西部で感染が広がり、3月16日から学校も全て休校、コンサートなどの集会は禁止、ドイツ在住の日本人はほぼ帰国を断念せざるを得ない状態となった。

その中で、ドイツでの規制と国全体のあり方について決定的な要となったのは3月11日のメルケル首相のスピーチだ。国民全体へ外出自粛を求め、医療関係で働く人々に敬意を表し、各自が自覚して行動することの大切さを切実に訴えたスピーチは、ドイツの人々に圧倒的インパクトを与えた。(日本語分析とスピーチ訳は以下の記事を参照していただきたい。<https://wan.or.jp/article/show/8882>)

個人的に驚いたのは、ドイツ人が全体的にそのメッセージを心に、ルールを守りだした事だ。ドイツ人が彼女を慕っているから、人気があるから、という訳ではなく、特に他の人々や

社会を助けるには個人から動かなくてはいけないという考え方がドイツ人の社会観にある、という点だ。日本は個人より社会全体を大切にし個々の行動より社会的ルールにより人々は動くと言われがちだ。しかし、コロナに対する態度では個人尊重の文化であるはずのドイツの方がよほど、社会貢献的に個人が自覚して意志的に動いている。ドイツを守ろうというナショナリズム的なものではなく、医療関係者や老人、病弱者などの為、社会貢献には皆自己を少し犠牲にするのは当たり前、という社会主義的な要素があるのではないか。(ドイツは税金が高いが文句を言う人は少ない。) 個人意志など尊重されず皆社会ルールで動いていると言われがちな日本では、首相が国民に切実なメッセージを送ることもなければ、それを国民はまともにはとらず、人々の社会的自覚も薄く、出社しろと言うから出社しないわけにはいかない、夜遊びに出ても見つからなければいいなど、社会より個人の勝手に動く人は少なくない。

ドイツでは3月27日から制限はますます厳しくなり、本格的なロックダウンが始まった。その効果が出てか、今のところ感染爆発や医療崩壊は避けられている。政府の方針に個人の権利縮小だと反対するグループもあり、ベルリンなど都市では禁止されているデモもあるが、マスク、人との距離を1.5mあけるというルールを守っての集まりとなっている。4月20日から一部店舗の開店が許可され、個人への規制も緩和された点もあるが、4月27日からは全国のスーパーやその他店舗、交通機関などではマスクが必須。学校は5月18日から学年を分けて開校の予定だが、本格的にロックダウンが終わるのは夏まで期待できないかも知れない。FFFに皆で参加できる日は来年だろうか。